

Kolmogorov の拡張定理の証明

関根・深澤研究室

平井祐紀

2016 年 6 月 1 日

T を任意の集合とし, $(X_t)_{t \in T}$ を位相空間としたとき, 積空間 $\prod_{t \in T} X_t$ 上に確率測度を構成する方法を考えよう. $\Lambda_1 \subset \Lambda_2 \subset T$ に対して,

$$\begin{aligned} \text{pr}_{\Lambda_1, \Lambda_2} : \prod_{t \in \Lambda_2} X_t &\longrightarrow \prod_{t \in \Lambda_1} X_t \\ \omega &\longmapsto \omega|_{\Lambda_1} \end{aligned}$$

と定義する. (すなわち, pr は射影である.) 特に $\text{pr}_{\Lambda, T} = \text{pr}_{\Lambda}$ と書くことにする. このとき明らかに $\text{pr}_{\Lambda_1} = \text{pr}_{\Lambda_1, \Lambda_2} \circ \text{pr}_{\Lambda_2}$ である. 可測空間の族 $(X_t, \mathcal{A}_t)_{t \in T}$ が与えられたとき, 射影 $\text{pr}_t : \prod_{t \in T} X_t \rightarrow X_t$ の族に対して $\bigotimes_{t \in T} \mathcal{A}_t := \sigma(\text{pr}_t; t \in T)$ と定義する. 特に $X_t = \mathbb{R}^d$ かつ $T = [0, \infty[$ としたとき, これは確率過程論に出てくる cylindrical σ -algebra と同様のものである.

定理 1 (Kolmogorov の拡張定理). T を任意の集合とし, $(X_t)_{t \in T}$ を Polish 空間の族とする. 任意の有限集合 $\Lambda \subset T$ に対して $(\prod_{t \in \Lambda} X_t, \bigotimes_{t \in \Lambda} \mathcal{B}(X_t))$ 上の確率測度 μ_{Λ} が与えられており, それらは両立条件を満たすとする. (i.e. $\Lambda_1 \subset \Lambda_2 \subset T$ を満たす任意の有限集合に対して

$$\mu_{\Lambda_1}(A) = \mu_{\Lambda_2}(\text{pr}_{\Lambda_2, \Lambda_1}^{-1}(A)), \quad A \in \bigotimes_{t \in \Lambda_1} \mathcal{B}(X_t)$$

が成り立つ.) このとき, $(\prod_{t \in T} X_t, \bigotimes_{t \in T} \mathcal{B}(X_t))$ 上の確率測度 μ で任意の有限集合 $\Lambda \subset T$ に対して

$$\mu(\text{pr}_{\Lambda}^{-1}(E)) = \mu_{\Lambda}(E), \quad \forall E \in \bigotimes_{t \in \Lambda} \mathcal{B}(X_t)$$

を満たすものがただ一つ存在する.

定理の証明に入る前に, 以下の有用な補題を証明しておく.

補題 2. $(X_t)_{t \in T}$ を Hausdorff 空間の族とする^{*1}. $\Lambda_0 \subset \Lambda_1 \subset \dots$ を T の有限部分集合列とする. 空でないコンパクト集合列 $(K_n) \in \prod_{n \in \mathbb{N}} \mathfrak{P}(\prod_{t \in \Lambda_n} X_t)$ に対して $C_n = \text{pr}_{\Lambda_n}^{-1}(K_n) \subset \prod_{t \in T} X_t$ とおく. このとき,

$$C_0 \supset C_1 \supset \dots \implies \bigcap_{n \in \mathbb{N}} C_n \neq \emptyset$$

が成り立つ.

^{*1} T_1 空間でもよいと思われる.

証明. $\Lambda = \bigcup_n \Lambda_n$ と書くことにする. 射影 pr_{Λ_n} は全射だから, $K_n = \text{pr}_{\Lambda_n} \text{pr}_{\Lambda_n}^{-1}(K_n) = \text{pr}_{\Lambda_n}(C_n)$ となることに注意しておく. 仮定より

$$K_n = \text{pr}_{\Lambda_n}(C_n) \supset \text{pr}_{\Lambda_n}(C_{n+1}) = \text{pr}_{\Lambda_n, \Lambda_{n+1}} \text{pr}_{\Lambda_{n+1}}(C_{n+1}) = \text{pr}_{\Lambda_n, \Lambda_{n+1}}(K_{n+1})$$

が成り立つ.

$$F_n^{(0)} = \text{pr}_{\Lambda_0, \Lambda_n}(K_n) \subset \prod_{t \in \Lambda_n} X_t$$

とおけば, これはコンパクト集合である. $(F_n^{(0)})$ は有限交叉性を持つので, $F_1^{(0)}$ のコンパクト性より $\bigcap_n F_n^{(0)} \neq \emptyset$ となる. $x_0 \in \bigcap_n F_n^{(0)}$ を一つ選んで

$$F_n^{(1)} = \text{pr}_{\Lambda_1, \Lambda_n}(K_n) \cap \text{pr}_{\Lambda_0, \Lambda_1}^{-1}(x_0) \quad (n \geq 1)$$

と定めれば, $F_n^{(1)}$ は空でないコンパクト集合となる. 実際 $\prod_{t \in T} X_t$ はまた Hausdorff 空間なので, $\{x_0\}$ は閉集合である. これより $F_n^{(1)}$ はコンパクト集合と閉集合の共通部分であるから, コンパクト集合である. 空でないことについては

$$x_0 \in \text{pr}_{\Lambda_0, \Lambda_n}(K_n) = \text{pr}_{\Lambda_0, \Lambda_1} \text{pr}_{\Lambda_1, \Lambda_n}(K_n)$$

であることに注意すれば分かる*2. このとき $\bigcap_n F_n^{(1)}$ が空でないことが分かるので, 同様の作業を繰り返して

$$x_k \in \bigcap_{n \geq k} \text{pr}_{\Lambda_k, \Lambda_n}(K_n) \cap \text{pr}_{\Lambda_k, \Lambda_{k+1}}^{-1}(x_k) \subset K_k$$

を満たす列 $(x_k) \in \prod_{t \in \Lambda} X_t$ を得る. この列はその構成法より両立条件

$$\text{pr}_{\Lambda_k, \Lambda_{k+1}}(x_{k+1}) = x_k, \quad k \in \mathbb{N}$$

を満たす. $\omega \in \prod_{t \in T} X_t$ を $\text{pr}_{\Lambda}^{-1}((x_k))$ から一つ選べば, 任意の $n \in \mathbb{N}$ に対して $\omega \in \text{pr}_{\Lambda_n}^{-1}(K_n) = C_n$ となり $\omega \in \bigcap_n C_n$ が成立. \square

Proof of theorem 1.

$$\mathcal{C} = \left\{ \text{pr}_{\Lambda}^{-1}(B) \mid \Lambda \subset T \text{ は有限集合かつ } B \in \mathcal{B} \left(\prod_{t \in \Lambda} X_t \right) \right\}$$

とおけば \mathcal{C} は集合半代数であり, $\sigma(\mathcal{C}) = \bigotimes_{t \in T} \mathcal{B}(X_t)$ が成り立つ. \mathcal{C} 上の有限加法的 (確率) 測度 μ を

$$\mu(\text{pr}_{\Lambda}^{-1}(E)) = \mu_{\Lambda}(E), \quad \Lambda \subset T \text{ は有限集合, } B \in \mathcal{B} \left(\prod_{t \in \Lambda} X_t \right)$$

で定める. Carathéodory の拡張定理より, μ が \mathcal{C} 上可算加法的であること*3, 特に \emptyset において連続であることを示せばよい*4. ここではその対偶を示すことにしよう. $A_0 \supset A_1 \supset \dots$ なる \mathcal{C} の元の列に対して,

$$\mu(A_n) \rightarrow \alpha > 0$$

*2 一般に, 写像 $f: X \rightarrow Y$ と $A \subset X$ について, $y \in f(A)$ は $A \cap f^{-1}(y) \neq \emptyset$ と同値なのであった.

*3 Bogachev [1, 1.3.10 Proposition]

*4 Bogachev [1, 1.3.3. Proposition]

が成り立つと仮定したとき、 $\bigcap_n A_n \neq \emptyset$ であることを言えばよい。これらが $\Lambda_0 \subset \Lambda_1 \subset \dots$ なる T の有限部分集合によって $A_n = \text{pr}_{\Lambda_n}^{-1}(E_n)$ と表現されているとしても一般性を失わない。Polish 空間上の有限測度は Radon 測度であるから^{*5}、適当なコンパクト集合 $K_n \in \mathcal{B}(\prod_{t \in \Lambda_n} X_t)$ をとれば

$$\mu_{\Lambda_n}(E_n \setminus K_n) < \frac{\alpha}{2^{n+1}}$$

が成立する。 $B_n = \text{pr}_{\Lambda_n}^{-1}(K_n) \in \mathcal{C}$ とおけば、

$$B_n \subset A_n, \quad \mu(A_n \setminus B_n) = \mu_{\Lambda_n}(E_n \setminus K_n) < \frac{\alpha}{2^{n+1}}$$

となる。ここで $C_n = \bigcap_{k=0}^n B_k$ とおけば

$$\begin{aligned} \mu(C_n) &= \mu(A_n) - \mu(A_n \setminus C_n) \geq \mu(A_n) - \mu\left(\bigcup_{k=0}^n A_k \setminus B_k\right) \\ &\geq \mu(A_n) - \sum_{k=0}^n \mu(A_k \setminus B_k) \geq \frac{\alpha}{2} \end{aligned}$$

となるから、 $C_n \neq \emptyset$ で (C_n) は減少列である。先ほどの補題を用いれば $\bigcap_n A_n \supset \bigcap_n C_n \neq \emptyset$ が示される。□

最後に、定理の証明中で用いた「Polish 空間上の任意の確率測度は Radon 測度である」という事実を証明する。念のため、Radon 測度の定義の復習から始める。

定義 3. X を Haudorff 空間とし、 $\mu: \mathcal{B}(X) \rightarrow [0, \infty]$ を測度とする。 μ は次の条件を満たすとき、Radon 測度であるという。

- (i) 任意のコンパクト集合 $K \subset X$ について $\mu(K) < \infty$ が成り立つ。(局所有限性)
- (ii) 任意の $B \in \mathcal{B}(X)$ と任意の $\varepsilon > 0$ に対して、あるコンパクト集合 K で $\mu(B \setminus K) < \varepsilon$ を満たすものが存在する。(内正則性)

命題 4. X を Polish 空間とする。 $(X, \mathcal{B}(X))$ 上の非負有限測度は Radon 測度である。

証明. $d: X \times X \rightarrow \mathbb{R}$ は (X, d) の位相と整合的で、 (X, d) が完備となるような距離関数とする。 μ は有限測度だから局所有限性は明らかであり、内正則性のみを示せばよい。

Step1: 任意の $A \in \mathcal{B}(X)$ が開集合で外側から、閉集合で内側から近似できることの証明。まずは、 μ が次の条件を満たすことを証明する^{*6}。

^{*5} X において $(X, \mathcal{B}(X))$ 上の非負測度 μ は次の条件を満たすとき、 μ を非負 Radon 測度と呼ぶ: (i) 任意の $B \in \mathcal{B}(X)$ と任意の $\varepsilon > 0$ に対して、あるコンパクト集合 K で $\mu(B \setminus K) < \varepsilon$ を満たすものが存在する、(ii) 任意のコンパクト集合 K で $\mu(K) < \infty$ が成り立つ。

^{*6} 主張 1 の証明には、 X が距離空間であることしか用いていない点に注意。

主張 1

任意の $B \in \mathcal{B}(X)$ と任意の ε に対して、閉集合 F_ε と開集合 U_ε で $F_\varepsilon \subset B \subset U_\varepsilon$

$$\mu(U_\varepsilon \setminus F_\varepsilon) < \varepsilon$$

を満たすものが存在する。

$$\mathcal{A} = \{A \in \mathcal{B}(X) \mid A \text{ は主張 1 の条件を満たす} \}$$

と定義する．このとき、 \mathcal{A} が閉集合全体を含む σ -加法族であることを示す． $A \in \mathcal{B}(X)$ が閉集合なら、 $F_\varepsilon = A$ とすればよい．さらに

$$U^n = \left\{ x \in X \mid d(x, A) < \frac{1}{n} \right\}$$

とおけば、 $\bigcap_n U^n = A$ であり^{*7}、 μ は有限測度だから

$$\mu(U^n) \xrightarrow{n \rightarrow \infty} \mu(A)$$

となる．

$$\mu(U^n \setminus A) < \varepsilon$$

なる U^n を U_ε としてとれば、

$$\mu(U_\varepsilon \setminus F_\varepsilon) = \mu(U_\varepsilon \setminus A) < \varepsilon$$

が成り立つ．すなわち、任意の閉集合は \mathcal{A} の元である．

次に、 \mathcal{A} が σ -加法族であることを示す． $A \in \mathcal{A}$ に対して主張 1 の条件を満たす $U_\varepsilon, F_\varepsilon$ を選ぶ．このとき $X \setminus F_\varepsilon \subset X \setminus A \subset X \setminus U_\varepsilon$ かつ

$$\mu([X \setminus U_\varepsilon] \setminus [X \setminus F_\varepsilon]) = \mu(F_\varepsilon \setminus U_\varepsilon) < \varepsilon$$

が成立． $X \setminus F_\varepsilon$ は開集合、 $X \setminus U_\varepsilon$ は閉集合なので、 $X \setminus A \in \mathcal{A}$ が分かる． X 自身は X の開集合なので、先ほどの議論より $X \in \mathcal{A}$ である．あとは \mathcal{A} が可算個の合併をとる操作について閉じていることを示せばよい． $(A_n)_{n \in \mathbb{N}}$ を \mathcal{A} の元の族、 $\varepsilon > 0$ とする．各 $n \in \mathbb{N}$ について、 $F_n \subset A_n \subset U_n$ かつ

$$\mu(U_n \setminus F_n) < \frac{\varepsilon}{2^{n+1}}$$

を満たす開集合 U_n と閉集合 F_n を選ぶ．ここで $U = \bigcup_n U_n$ と定義すれば、 U は $\bigcup_n A_n \subset U$ を満たす開集合である．また $C_k = \bigcup_{n=0}^k F_n$ と定めると、各 C_k は閉集合であって $C_k \subset \bigcup_n A_n$ となる．いま C_k は増大列だから

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \mu(C_k) = \mu\left(\bigcup_{k \in \mathbb{N}} C_k\right)$$

が成り立つ．さらに μ の有限性に注目すれば

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \mu(U \setminus C_k) = \mu(U) - \lim_{k \rightarrow \infty} \mu(C_k) = \mu(U) - \mu\left(\bigcup_{k \in \mathbb{N}} C_k\right) = \mu\left(U \setminus \bigcup_{k \in \mathbb{N}} C_k\right) \quad (1)$$

^{*7} A は閉集合である．

U_n, F_n の選び方より

$$\mu\left(\bigcup_{n \in \mathbb{N}} [U_n \setminus F_n]\right) \leq \sum_{n \in \mathbb{N}} \mu(U_n \setminus F_n) < \sum_{n \in \mathbb{N}} \frac{\varepsilon}{2^{n+1}} = \varepsilon$$

であるから, $U \setminus \bigcup_{k \in \mathbb{N}} C_k \subset \bigcup_{n \in \mathbb{N}} [U_n \setminus F_n]$ に注意すれば

$$\mu\left(U \setminus \bigcup_{k \in \mathbb{N}} C_k\right) \leq \mu\left(\bigcup_{n \in \mathbb{N}} [U_n \setminus F_n]\right) < \varepsilon \quad (2)$$

を得る. (1) と (2) から, 十分大きな n について

$$\mu(U \setminus C_n) < \varepsilon$$

となることが分かる. そこで開集合 U_ε および閉集合 F_ε を $U = U_\varepsilon, C_n = F_\varepsilon$ と定義すれば $F_\varepsilon \subset \bigcup_n A \subset U_\varepsilon$ かつ

$$\mu(U_\varepsilon \setminus F_\varepsilon) < \varepsilon$$

が成立. よって $\bigcup_n A_n \in \mathcal{A}$ も示された.

以上の議論により, $\mathcal{A} = \mathcal{B}(X)$ の証明が完了した. これはすなわち, 主張 1 が成り立つということに他ならない.

Step2: μ が緊密であることの証明. このステップでは, 次の主張を証明する.

主張 2

任意の $\varepsilon > 0$ に対して, あるコンパクト集合 K_ε で

$$\mu(X \setminus K_\varepsilon) < \varepsilon$$

を満たすものが存在する.

$\varepsilon > 0$ を任意の固定する. $(U_j^n)_{j \in \mathbb{N}}$ を半径 $\varepsilon/2^n$ の開級の族で, X の被覆となっているようなものとする^{*8}. μ の可算加法性より

$$\lim_{j \rightarrow \infty} \mu\left(\bigcup_{k=1}^j U_k^n\right) = \mu(X)$$

が成立. さらに μ の有限性より,

$$\lim_{j \rightarrow \infty} \mu\left(X \setminus \bigcup_{k=1}^j U_k^n\right) = \mu(X) - \lim_{j \rightarrow \infty} \mu\left(\bigcup_{k=1}^j U_k^n\right) = 0$$

となる. これより, 十分大きな m_n をとれば

$$\mu\left(X \setminus \bigcup_{k=1}^{m_n} U_k^n\right) < \frac{\varepsilon}{2^{n+1}}$$

が成り立つ. ここで $W_n = \bigcup_{k=1}^{m_n} U_k^n$ および $W = \bigcap_{n \in \mathbb{N}} W_n$ と定義する. このとき, W が全有界^{*9}であることを示す. $\delta > 0$ に対して, $\varepsilon/2^{k_\delta} < \delta$ となるような $k = k(\delta)$ をとる. このとき, $W \subset W_k = \bigcup_{j=1}^{m_k} U_j^m$ と

^{*8} 可分距離空間は Lindelöf 空間なので, このような族が取れる.

^{*9} X を距離空間とする. 任意の $\varepsilon > 0$ に対して有限個の $a_0, \dots, a_n \in X$ で $X = \bigcup_{i=0}^n U_\varepsilon(a_i)$ を見たすものが存在するとき, X は全有界であるという. よく知られているように, 距離空間 X がコンパクトであることは, 完備かつ全有界であることと同値である.

なり W は半径 $\varepsilon/2^k$ の開球で覆われる. すなわち, W は全有界である. X は完備距離空間だから, その閉包 $\overline{W} =: K$ はコンパクト集合である. また, W の定義より

$$\mu(X \setminus K) \leq \mu(X \setminus W) = \mu\left(\bigcup_{n \in \mathbb{N}} [X \setminus W_n]\right) \leq \sum_{n \in \mathbb{N}} \mu(X \setminus W_n) < \sum_{n \in \mathbb{N}} \frac{\varepsilon}{2^{n+1}} = \varepsilon$$

となる. すなわち, 主張 2 が成立する.

Step 3: μ の内正則性の証明. $B \in \mathcal{B}(X)$ および $\varepsilon > 0$ とする. このとき, step1 の議論から閉集合 $F \subset B$ で

$$\mu(B \setminus F) < \frac{\varepsilon}{2}$$

を満たすものがとれる. また step2 の議論から, コンパクト集合 K で

$$\mu(X \setminus K) < \frac{\varepsilon}{2}$$

なるものがとれる. ここで $K' = F \cap K$ とすれば, K' は $K' \subset B$ なるコンパクト集合であり^{*10}, さらに次の不等式を満たす.

$$\mu(B \setminus K') \leq \mu(B \setminus K) + \mu(B \setminus F) \leq \mu(X \setminus K) + \mu(B \setminus F) < \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2} = \varepsilon$$

これより, μ の内正則性が示された. □

参考文献

- [1] Vladimir I. Bogachev. *Measure Theory*. Springer-Verlag Berlin Heidelberg, 2007.
- [2] 小谷眞一. 測度と確率. 岩波書店, 2005.
- [3] Laurent Schwartz. *Radon Measures on Arbitrary Topological Spaces and Cylindrical Measures*. Tata Institute Monographs on Mathematics & Physics. Oxford University Press, 1974.

^{*10} コンパクト集合と閉集合の共通部分はコンパクト集合である.